

にゅ～
生徒会
パラダイス

ミルク 学園

小説 神崎美宙
挿絵 FCT



二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



うふふ……紅茶は
ゆつくり召し上がってくださいね……

なんじょうみやこ
南条美夜子

生徒会副会長を務める令嬢。
物腰がやわらかく、お淑やかな
才女で、生徒会のまとめ役。



登場人物紹介

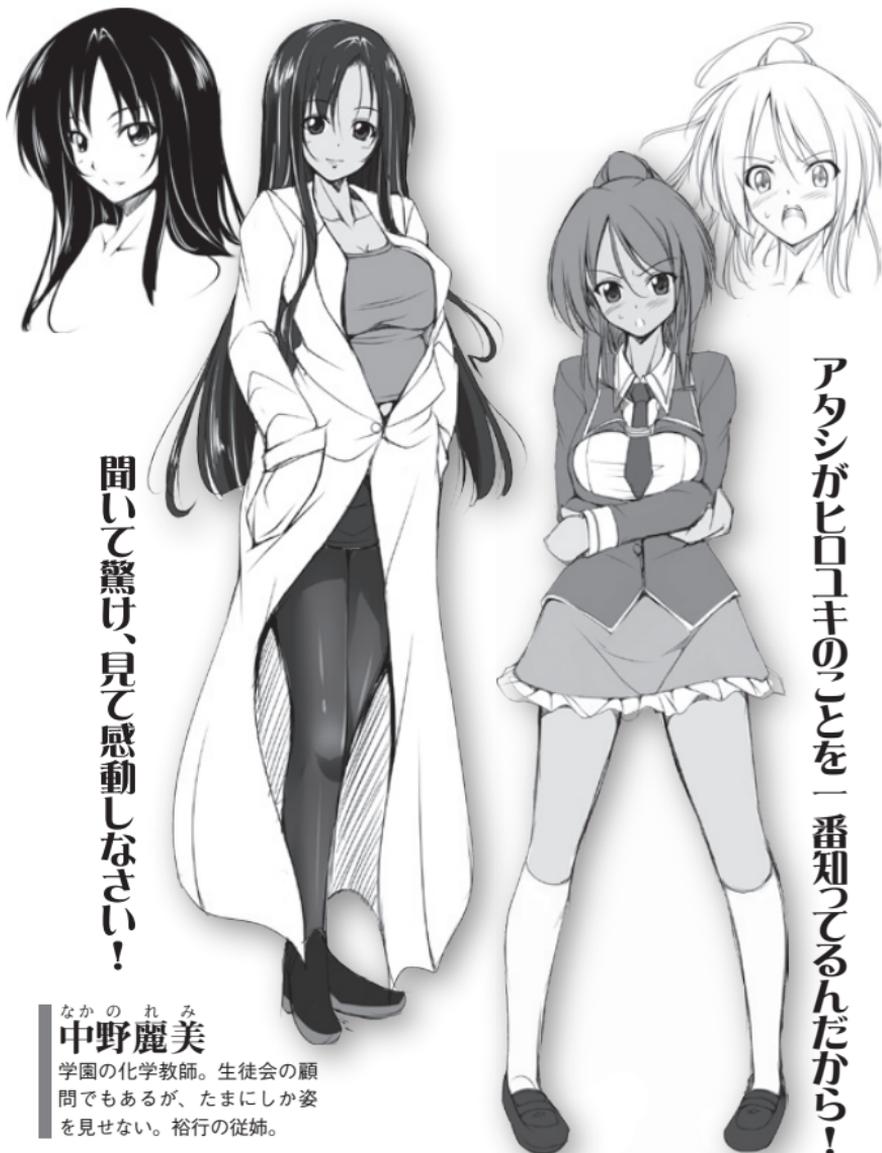
Characters

ほうおういんとう か
鳳凰院桃華

私立鳳凰院学園の理事長の孫娘に
して生徒会長。生粋のお嬢様で、
ちょっとワガママな性格。

わたしが好きって言うてあげた裕行は
わたしのこと好きでしょ？





聞いて驚け、見て感動しなさい！

なかのれみ
中野麗美

学園の化学教師。生徒会の顧問でもあるが、たまにしか姿を見せない。裕行の従姉。

なかのひろゆき
中野裕行

麗美に勧められ、雑用係として生徒会を手伝う少年。

あいかわ
相川なつき

生徒会書記の元気な少女。気の強い性格から、桃華と対立することもしばしば。裕行とは幼馴染み。

アタシがヒロユキのことを一番知ってるんだから！

終章	
第六章	ミルクパラダイス
第五章	淑女の悩み
第四章	嫉妬するお嬢様
第三章	幼馴染みの告白
第二章	初ミルク搾り
第一章	従姉のミルクレッスン
序章	

「そうでしょ？ もっとしてあげるから、ズボンを脱ぎなさい」

一瞬迷ったが、裕行は大人しく下着とズボンを脱いで下半身を晒した。股間の逸物は先ほどのキスですっかり膨張し、天井に向かっていきり勃っている。

そして何だかんだ言いつつも、心の中ではお嬢様とのエッチな行為に期待してしまふ。

「きゃっ……あつ、な、何でもないわよっ！」

小さな悲鳴を上げたように思ったが、お嬢様はすぐに引き攣った表情を引き締め直してペニスに手を伸ばした。しかし慌てていたのか思いつきり握り締められて、突然の圧迫感が股間を襲う。

「痛っ、桃華さんっ……もう少し優しくっ……」

「え、あつ……わ、分かっているわよ！」

熱い鍋を触ったかのように即座に手を離し、少女は強がってみせた。しかし目の前でヒクつくペニスを目の前に、一度引っ込めた手は止まったまままだ。

「なつきには負けないんだからっ……」

意を決した美少女は太ももの間へと身体を移動させ、勃起した肉棒に顔を近づける。そして今度はそつと根元の方に指を巻きつけ、ペニスを固定した。

ライバルへの対抗意識で強く輝く瞳は、ピンク色をした龟头をジッと見つめる。

「あ、あの……桃華さん……あんまり見られると恥ずかしいです……」

美少女の視線に耐えきれなくなった少年が恥ずかしそうに俯く。金髪少女の美貌が股間

に迫ってきて、生温かい鼻息が過敏な亀頭をくすぐる。

「何を情けないこと言ってるのよ！ ほら、こうしてほしかったんでしょ……」

びちゅっ——。意を決したように目を瞑ったお嬢様が、肉勃起の先端をペロリと舐めめた。生温かい舌肉が先端のワレメの部分をなぞり、股間に唾液の温かさどぬるつとした感触が残る。

「ひあっ！ そ、それは……」

「大人しくしなさいっ……これくらいで騒いでどうすんのよっ……」

「は、はい……」

裕行が頷くと、桃華は再び股間に顔を近寄せた。サラサラとした金髪が下半身を撫で、敏感な亀頭に舌の粘膜が擦りつけられる。

（桃華さんが僕のち○こを舐めてるっ……）

お嬢様は舌先で何度も先端を舐めた。そのたびに下半身に電流のような甘い痺れが走り、腰がビクビクと震える。あの桃華がフェラ奉仕をしていてくれると思うだけで、歡喜のあまりに逸物が勝手にヒクつく。

「ちゅ、ちゅる……変な味がするわね……」

ワレメからはすでに透明な我慢汁が溢れていた。桃華は蒸れた匂いを気にすることなく、その粘液を丁寧に舐め取ってくれる。気持ちいいが舌先が触れるだけの愛撫はどこか物足りなくてじれったくて先汁が止まらない。

そのせいでペニスの先端は唾液まみれになってしまい、大きく膨らんだ亀頭の表面が妖しく輝いていた。

「もう、こんなに大きくしちゃって……エッチなんだからっ……」

桃華は自慢の巨乳を太ももに押しつけながら、ペニスに口を近づける。今度は舌だけでなく瑞々しい唇を小さく開き、先汁を滴らせ勃起した逸物を呑み込んでいく。

「ああっ！ 桃華さんの、口の中、温かくて気持ちいいっ……」

温かい口内粘膜に男根全体が包まれ、下半身が快感に震え力が入らなくなってくる。学園一のワガママお嬢様が股間に美顔を埋め、自分のペニスにしゃぶりついているという光景に興奮は高まってしまう。

「ちゅ……ちゅ、ちゅるる……ちゅうううっ……」

桃華はしばらく肉棒をキャンディーのようにペロペロ舐めたり、頬張ったりして少年の反応を窺っている。上目遣いに気持ちいいと尋ねてくる彼女の仕草に、思わず心を奪われてしまった。

「……桃華さん、もう少し……強くお願いします……」

お嬢様のフェラが気持ちよくてついそんなことを言ってしまった。絶対に怒られると首をすくめていると、美少女は不思議そうに首を傾げる。

「こ、こんな感じでいいかしら……」

桃華は文句を言うどころか言われた通り、先ほどより強く亀頭に吸いついてきた。そし

て自慢の金髪を前後に揺らしながら、唇で肉竿を扱き裏筋を舌で擦る。

「そ、そうですっ……いいです、もっとな……」

急激に股間を襲う刺激が大きくなり、腰がビクツと跳ねた。少年の反応を見たお嬢様は嬉しそうに目を細め、奉仕を続ける。

チュッ！ チュッチュ、チュウウウ……ッ！

綺麗な唇が勃起したペニスを呑み込んで吐き出す。プライドの高いお嬢様が必死に口奉仕をしている姿を目の前に、彼女への苦手意識のようなものは薄れていった。そのおかげでこの行為を楽しむ余裕も出てきた。

桃華の口の中を肉棒が入りする姿だけで十分に刺激的だが、彼女との行為を素直に楽しみ始めた少年は性欲に貪欲になり始めている。

「……ちゅ、ちゅむ……どうふいふあほ……？」

何かを訴えるような視線に気づいたお嬢様は自分の胸を見つめる。

「分かった、また胸でしてほしいのね？ ホントに裕行ったらスケベなんだから」

そう言いつつも裕行に求められていることが嬉しいのか、お嬢様は上機嫌だった。

「い、いや……そういうわけじゃ……」

「何よ、じゃあしなくていいの？ なつきなんかよりわたしの胸の方が好きでしょ？」

「うっ……」

桃華はボタンを外し制服の胸元をはだけていく。ピンクの下着に包まれた乳房の白い乳

肌が姿を現し少年の視線は釘付けにされる。お嬢様はたつぷりとミルクの詰まった乳タンクを両腕で抱えてぷるぷると上下に揺らしてアピールしてきた。

「ほら、触りたいなら、触っていいわよ……」

後ろ手でホックを外すと、ブラのカップがズレて重量感のある乳房に比べ小さめの乳首が露わになる。そしてお嬢様は少年の手を掴むと自分のバストへと導いた。手のひらに弾力と柔らかさを併せ持った極上の乳感が広がる。

「あ、おっぱいが……」

フェラで少女も興奮していたのか、裕行が軽く乳肉を揉んだだけで先端から白い乳液が滲んできた。甘いミルクの香りが辺りに漂い、お嬢様の頬が赤く染まる。

「こ、これは……アンタがエッチな揉み方するから、仕方ないじゃないっ……」

ミルクの溢れる巨乳に視線を落とす、桃華は恥ずかしそうにそっぽを向いた。それでも裕行はお嬢様のおっぱいを夢中になって揉みしゃぶり続ける。

「そんなに胸が好きなら、こっちでしてあげるっ……」

気の強い金髪少女はすぐに少年の方に向き直ると、自慢のバストを両手で持ち上げる。

むにゅ、むにゅうううっ――。

「あう！ 桃華さんの胸がっ……」

メロンのようなサイズを誇る乳肉が肉棒を左右から挟み込んだ。口の中とはまた違う甘美な感触に股間は打ち震え、思わず声を出してしまった。

「ほら、どうなの？ 気持ちいいでしょ？」

お嬢様はわざと少年の羞恥心を煽るように上目遣いに見上げながら大胆に胸を押しつけてくる。ミルクで濡れた乳首がペニスを擦り、コリコリとした感触と乳肉の柔らかさに竿全体が包まれた。温かいおっぱいから彼女の優しい感情がしつかりとが伝わってくる。

にゆりゆ、にゆるっ、にちゅ、にゅちゅッ！

挟み込んだ肉棒を抜く乳房はミルクで濡れ、初めからその動きは滑らかだった。瞬く間にペニスはミルクまみれになり、股間の上で大迫力の乳肉が揺れ躍る。

「ン、ンふ、どう……？ こんなこと、わたしにしかしてもらえないわよ？」

お嬢様は胸を揺らしながら得意げにツリ目を細めて微笑む。その小悪魔のような笑みを向けられた少年は素直に何度も頷いた。

「き、気持ちいいですっ……すごくっ……」

その言葉を聞いて桃華は気をよくしたのか、ますます奉仕に力を入れ始める。左右から乳房を中央に寄せ上げ、間に挟まれた肉棒を何度も扱き上げ熱っぽい吐息を漏らした。

サラサラとしたストレートの金髪が大きく揺れ、少女が乳肉を固定するために握力を込めるたびにピンク色の乳首からは白い乳液が噴き出る。

告白して吹っきたのかお嬢様は大胆に胸を揺らしまくった。以前にパイズリをしてもらった時よりも、確かな愛情を感じ心が温かくなってくる。以前にパイズリをしても

「はあ、胸が擦れて……ンはあ、火傷しちやいそうっ……」

乳奉仕に夢中になっているお嬢様の額には汗が滲み、ミルクで白くなっている乳肌も赤く染まっていた。テクニックと呼べる代物ではないが、少女の懸命さは十分に伝わってくる。

（あの桃華さんが僕のために、こんなに一生懸命にしてくれるなんて……）

目の前で弾む乳房のエロティックな光景と、股間に広がる乳悦に刺激された射精欲が膨張していく。玉袋はキュッと硬化して、全身が火照ってきた。そして彼女の意外に献身的な一面に胸も温かくなってくる。

「何をニヤニヤしてんのよ、気持ち悪いわねっ……」

「えっ……そんなこと言われてもっ……」

悪態をつきながらも、桃華は奉仕の手を止めない。エラの張った亀頭も血管の浮かび上がった竿も丸ごとぬめる乳肌に包まれ、密着したまま上下に揺れ動く。極上の乳圧で扱われた瞬間にペニスが甘く痺れ、すぐに意識は股間へと引きずり戻される。

「ほら、余計なこと考えなくていいから、さっさとイっちゃいなさいよっ……」

両手で乳房をこねあわせるようにペニスを扱きながらお嬢様は顔を屈め、胸の谷間から顔を覗かせた亀頭に吸いついた。

「ああっ！ それは、まずいっ……ですっ……」

先端から溢れる我慢汁とミルクを舐め取るように舌先で亀頭を突つつかれ、全身に電流のような快感が駆け巡る。

裕行が切羽の詰まった声を上げると、桃華はさらに射精を促すように亀頭を舐めしゃぶりミルクまみれの乳房を擦りつけてくる。ぎこちない動きながら必死に少年を気持ちよくしようというお嬢様の奉仕で、限界まで勃起した逸物は今にも破裂しそうだった。

「桃華さん、もう我慢できませんっ……」

高飛車お嬢様のミルクパイズリフェラを受けて、射精欲はもう抑えきれないほどに膨れ上がっていた。

「ん、んんっ……出るの？ いいわよ、じゅ、じゅぷっ、ちゅぱっ……」

絶頂を訴える少年の顔を見つめ、桃華はペニスにしゃぶりつきながら頷く。火照った顔と髪の張りついた汗で滲んだ首筋がやけに色っぽかった。

しかもコリッとした乳首を血管の浮かび上がったペニスに擦りつけられ、快感は爆発的に高まり我慢の限界を超える。

「うっ、イクっ！ 出ちゃいますっ!!」

甘い香りのするミルクと生温かい唾液に包まれた肉棒がついに悲鳴を上げた。マシユマロのような心地よい乳圧とザラザラとした舌先の刺激に晒された若い男根は、絶頂を迎えて痙攣を始めた。

「ちよつと……むぐっ、ンンッ!!」

異変を感じたのか、桃華が見つめてくる。

尿道の奥から精液がマグマのように湧き上がり、無意識のうちに腰を突き出していた。



ビュル、ビュビュ！ ドビュ、ビュルビュツ……ビュルル~~~~ツツ！！
「ああ、出る、出るっ……止まらないっ！！」

情けない悲鳴とは対照的に、ペニスは少女の口内で力強く脈動する。そのたびにドロドロとした粘度の高い精液を吐き出し、腰は快感で痺れ全身から力が抜けていく。

「んぐっ……ちよ、ちよつと、ぷはっ……きゃっ！」

喉を打ち抜くような射精の勢いに耐えきれなくなった桃華はペニスを吐き出した。しかし肉棒の痙攣は治まるどころか、少女の顔めがけて白い飛沫を浴びせ続ける。

桃華は目の前で起こった凄まじい射精シーンを呆気に取られた様子で見つめた。

「す、すみませんっ……でも、うあああっ……」

若いペニスは無遠慮に精液をぶちまけ、ブロンドの髪やお嬢様の美顔を白く汚していく。
「も、もうっ……裕行ったら、出しすぎよっ……」

桃華は驚いたように目を白黒させながら、飛沫の行方を見つめている。ミルクまみれになった乳房を精子がさらに白く上塗りし辺りに生臭い匂いが漂う。

長い射精の絶頂感が和らぎ、裕行はその場に崩れ落ちた。

「はあ、はああ……」

深いため息をつきながら呼吸を整える少年の下で、お嬢様は嫌がる素振りなど見せず全身に付着した精液を指で拭い取っている。そして小指の先についた精液をペロリと一舐めして眉を顰めた。

「ううん……やっぱり変な味ね……」

「わわっ、舐めなくてもいいですよおっ……」

絶頂の余韻も冷めてきて冷静になった少年は、慌ててティッシュを差し出す。

「ン……ありがと……」

金髪少女は一瞬戸惑ったような表情を浮かべたが、すぐにツンとすました顔で顔や身体についた精液を拭き取り始めた。

あまりに自然にお礼を言われて驚いていると、再びお嬢様と目が合った。

「ねえ……なつきとはエッチしたんでしょ？」

「え、は、はい……」

ストレートすぎる質問だったが、彼女の迫力には勝てず素直に頷く。それを見た美少女は切れ長の眉をピクリと動かししたが、決意を固めたように瞳の輝きが増した。

「裕行、アンタがどうしても……どうしてもわたしとエッチしたいって言うなら、してあげてもいいわよ……」

お嬢様の顔は真っ赤で俯き気味だった。しかも普段のように自信たっぷりの声ではなく、語尾は聞き取りづらくらい小さい小さくなっている。

「ほ、本当ですか……？」

見たこともない桃華の表情に、少年の心は高鳴った。

「アンタがどうしてもって言うならねっ、仕方なくだからねっ……」

処女肉はギンギンに勃起した男根を包み込むと、きゆうつと締めつけてくる。それでいて膣壁は肉ヒダが多くて、ペニスの表面にしつかりと吸いついてきた。

「んはあ……お腹が熱くて、いっぱいになってます……」

裕行が女陰の感触に浸っていると、美夜子も何とか上半身を支え息を切らしながらため息を漏らしている。

「無理に動かなくていいですから……」

しばらく二人は結合したまま見つめあっていた。何とも言えない穏やかな時間だった。身体も心も優しい美夜子に包み込まれていると、母に抱かれているような安心感がある。

互いのぬくもりを結合部だけでなく全身で感じながら、二人は自然と唇を重ね肌を抱きあわせた。

「あふ、んう……だいぶ慣れてきました……」

「本当ですか、痛みは大丈夫ですか……?」

先に沈黙を破ったのは美夜子だった。普段と変わらぬ柔らかい笑みを浮かべ、上体を起こしながら少年を見つめる。

「はい、裕行さんを気持ちよくして差し上げますね……」

痛みが和らいだのか、少女はゆっくりと腰を浮かせた。そしてペニスが抜けそうになる直前で再び腰を沈め、ゆっくりとお尻を振り始める。

かなり低速な動きながら、美夜子の豊満すぎるバストはその動きに合わせて大胆に揺れ

て弾む。たつぷんたつぷんと柔らかそうな乳房が上下に波打ち、先端の乳首には白いミルクが滲んでいた。

「ほう、こういう感じで……い、いかがでしょうか……」

大きく息を吐きながら少女は腰を動かし続ける。処女を喪失したばかりで膣口は痛々しく押し広げられているが、大きく膨らんだペニスをしつかりと根元まで呑み込んでいた。

愛液も大量に分泌されており、結合部のすべりが滑らかになる。それでいて何重にも連なる肉壁が竿全体を締めつけてくるのだから堪らない。

「き、気持ちいいです……」

「本当ですか？ よかったです……ン、ンふうっ……」

裕行が頷くと美夜子は嬉しそうに目を細める。

ゆつたりとした動きながら膣圧と柔肉で扱かれては、たちまちペニスも反応して先端から先汁を漏らしていた。大淫唇と肉棒の密着した間からは愛液と我慢汁の混ざった粘液が溢れてくる。

「ふふ……裕行さんも、遠慮なさらずに……動いてくださいね……」

ウェーブのかかった茶髪を揺らしながら、少女はしっかりと発育した尻肉を股間に打ちつけてきた。

「それじゃあ、美夜子さんも痛かったら言ってくださいね……」

「ええ。ありがとうございます……」

恋人同士のような空気に包まれて気恥ずかしい感じだが、少女の腰使いで湧き上がったきた性欲はどんとどんと強くなる。

裕行も美夜子の細腰を両手で捕まえ、下から腰を突き上げた。

「はぁん！ あ、激しいっ……強い、ですっ……」

初めはゆっくりと思っていたが、動き出した下半身は止まらない。ペニスを膣壁に擦りつけ子宮を突く快感に全身が打ち震えた。

（うっ……気持ちよすぎて、あんまりもたないかも……）

いきなり乱暴な突き上げを受けた美夜子の身体は大きく仰け反る。倒れないように少年の手を手繰り寄せ、何とかバランスを取っている状態だ。

「そ、そんなに強く、されたら……ああ、はぁんっ……」

少年の腰使いはどんとどん激しさを増していき、少女の喘ぎ声も大きくなる。初めは声を抑えようとしていたようだが、すぐに我慢できなくなってしまったようだ。

自分から腰を使い始めた美夜子だが下から突き上げられると、感じすぎてすっかり裕行にされるがままになっている。

「おっぱいが……いっぱい出てきますよ……」

目の前で大胆に揺れる乳房へと手を伸ばした。柔らかな手触りを感じながら揉み搾れば、すぐに桃色をした乳頭の先に白いミルクが滲んでくる。

下から持ち上げるようにずっしりと重みのある乳房を揺らし、乳首を指で摘むと美夜子

の喘ぎ声はいっそう大きくなった。

「はぁんっ！ 胸まで、搾られたら……おかしく、なつてしまますっ……」

胸をペニスで突かれ、胸も搾乳された少女は堪らず倒れ込むように少年に抱きつく。胸元に学園一大きなおっぱいが押し当てられ、ミルクで濡れたマシユマロ乳がむにゅつと潰れて変形した。

それでも裕行は腰の動きを止めない。快感を貪るようにいきり勃つ肉棒を、何度も処女膣に打ち込んだ。

「ああ……裕行さん、嬉しいっ……嬉しいですよ、わたくし、幸せですよ……」

乱暴で一方的な責めなのに、少女は息を弾ませながらも嬉しそうに微笑む。独占欲を刺された少年は自分のものだと言わんばかりに彼女の身体を強く抱きしめる。

「ん、はあ、ああ……お願いです……キス、キスをしてください……」

「いいですよ、はい……」

腕の中にある肉付きのいい肢体を抱き寄せ、頭を起こして唇を突き出した。

「ちゅむ、ちゅう……裕行さん……ちゅうう……」

唇を重ねるだけの軽いキスでは感情の高まった男女は満足しない。すぐに口を開いて舌を激しく絡ませあい、相手の唾液をすすった。

(美夜子さん、キス激しい……)

万感の想いを果たした少女のキスは情熱的だ。普段のおっとりとした性格からは想像で

きないくらい、積極的に舌を擦りつけてくる。

さらに唇同士を重ねあわせて呼吸すら許さないとばかりに、ちゅうちゅうと音を立てて吸いまくった。

「ンンっ、ちよ……ぷはっ……待って、ちゅむっ……」

口の中を隅々まで生温かいザラつく舌で舐めまわされ、大量の唾液を流し込まれる。

あまりに接吻に夢中になったせいで愛撫が疎かになっていた。ペースを握るとか考えてではなく、ただ純粹に美夜子にもっと気持ちよくなってほしい。

その一心で腰を振った。もちろん胸を揉んでミルクも搾った。

「ひいあっ、ふぁん……素敵です、頭がおかしくなってますっ……」

年齢以上に発育した尻肉と少年の細い腰がぶつかりあう。グラマーな美夜子の身体が大きくバウンドし、彼女の身体が落ちてくるたびに臆奥に深々とペニス突き刺さった。

「僕も、気持ちよすぎてっ……イキそうですっ……」

長い茶髪を振り乱しながら、上気した顔は宙を見つめる。メロンのような爆乳はミルクを滴らせながら縦横無尽に暴れまわり、もはや手のひらでは押さえきれない。

ぴゅる、ぴゅ、ぴゅっ、ぴゅう~~~~ッ!!

それでも興奮状態の少年は握力に任せて、暴れ乳を揉み搾った。

乳首からは射精のように勢いよくミルクが飛び散る。温かい飛沫が顔や胸にかかるが、そんなこと気にならない。むしろミルクの香りが、甘酸っぱい少女の汗の匂いと混ざって

濃厚な芳香となりさらに興奮を引き立てた。

「ああ、わたくしも……わたくしの身体も変ですっ！」

少女の喘ぎ声も切羽の詰まった感じになってくる。絶頂が近いのだろう。しかしその身体の変化の正体を知らない美夜子は不安げな表情を浮かべる。

「大丈夫ですから、このままっ……」

そんな彼女を安心させようと思ったわけではないが、無意識のうちに行き場を失いふらふらとしていた手を手繰り寄せた。

「は、はいっ……でも、ああっ……」

ギョツと握った手に力を込める美夜子。汗ばんだ手のひらからは、少女の興奮と緊張が伝わってくる。

（そろそろ、ヤバいっ……）

限界が近づいていることを感じた裕行は、さらに快感の頂に昇っていくように腰を突き上げた。強くそして高速で膣内を、ペニスが入り出す。

敏感なカリ裏が肉天井で擦られ、裏筋にも膣ヒダが絡みついてきて堪らない。大量に分泌されている蜜がピストンを滑らかにし、強烈な締めつけが射精を催促する。

「裕行さん、我慢なさらずに……お好きな時に、ああっ……」

一旦は少年の責めにされるがままだった美夜子も、いつの間にか自分からも腰を使い始めていた。だんだん二人の動きはシンクロし始め、膣摩擦の心地よさは倍になって一気に

射精感が高まる。

「うう、ごめんなさいっ……もう、我慢できそうにないですっ！」

少年は込み上げてくる射精衝動を必死に抑えながら叫んだ。

ズリュ、ズツチャ、ズツチャ、ズチュズリュッ……。

愛液と先汁で濡れた粘膜が擦れあい、淫らな音が室内に響く。猛然と腰を振りながら、興奮は最高潮まで達していた。狭い膣壁に扱き上げられた若い逸物が悲鳴を上げる。

理性ではどうしようもないところまで昇りつめ、身体は快感を求める本能に従ってペニスを処女肉へとねじ込んだ。

「ダメ、ダメですっ……頭がボーっとして、ひあ、あひいっ！」

上品で控えめな美夜子の顔が快感に染まり、恍惚とした表情を浮かべている。その貌が少年の興奮をさらにかき立てる。

ついに股間の奥から込み上げてくる欲望のマグマを止めることができなかった。

「も、もう出るっ！ 出ますっ!!」

「はいっ……中に、このまま、中にお願ひしますっ……」

少年が絶頂を訴えると、美少女は膣出しを切望する。その意味をちゃんと理解しているのか不安だったが、今はそんなことを考えている余裕はなかった。

大きなヒップが痙攣を起こし、膣内でも肉ヒダが蠢きペニスを締めつける。トドメと言わんばかりに限界まで膨張した肉棒を美夜子の子宮口に叩きつけた。



「イクっ、出ちゃいますっ!!」

そう叫んだ瞬間に目の前が白く霞む。

「ああ、気持ちいいっ! 気持ちよすぎて、はあん、あああああ~~~~ンッ!!」

二人の声がシンクロし、腹筋が痛いくらいに震える。そして尿道を一気に欲望の塊が駆け上がった。

ドビュッ! ビュブ、ビュルルッ! ビュ、ビュッ……ビュブブビュル~~~~ッ!!

子宮口に押しつけた亀頭の先から勢いよく精液が弾け飛ぶ。白い体液は瞬く間に腔内を満たし、逆流して結合部から溢れてくる。

「ああっ、出てますっ……裕行さんの、精液がっ……お腹にい~~~~っ!」

腔に出された瞬間にアクメに達したのか、少女の手足はビクビクと震え甲高い悲鳴が辺りに響いた。虚ろな視線で少年を見つめ、乳房からは大量のミルクを噴き出している。

(うわああっ……と、止まらないっ……)

絶頂に達した二人は互いに手を取りあい力いっぱい握り締めあう。その間にも勃起ペニスは無遠慮に少女の腔内に白濁液を流し込み続けた。

「はふ、ンう……も、申し訳ございません……」

胎内にたっぷりと射精を受けた少女は脱力して覆いかぶさってくる。柔らかくて火照っている彼女の身体を抱きとめると、心地よい絶頂の余韻を二人で楽しんだ。

「ふふ……やっつと、裕行さんと一つになれました……」

満足そうに微笑む美夜子の顔を見てみると、こちらも嬉しくなってくる。

「僕も、よかったです……」

「裕行さんに喜んでもらえて、嬉しいです……」

激しく互いを求めあうセックスも気持ちいいが、性欲の激昂も収まりこうやって静かに抱きあうのも心が温かくなるから好きだ。

「あの、もう一回……キス……お願いしてもいいでしょうか……?」

「キスですか？ 美夜子さん、キスが好きですね」

「はい……お恥ずかしいですが、大好きみたいです……」

彼女のような美少女に、顔を赤らめながらそんなことをお願いされて断るはずもない。

「もちろんいいですよ……」

少年が口を突き出すと、年上の少女がそつと唇を重ねてくる。

キスを繰り返すうちにさつき萎えたばかりの逸物が、またしても硬くなり始めていた。

「あの……美夜子さん、また元気になっちゃったみたいで……」

「それは……もしかして……あ、ああん♪」

少年の言葉を聞き、視線を落とした少女はハッと息を呑む。しかし見事なサイズを誇る乳肉を鷲づかみにされると、美夜子は可愛らしい悲鳴を上げた。

「また、いいですか……?」

「どうぞ、裕行さんの好きなだけ……お相手させてください……」

「あああつ！　ね、従姉さんっ……待って、ううっ……」

柔らかく肉ヒダの多い大人の女性器は少年のペニスを根元まで一気に呑み込む。突然に肉竿全体が蜜で潤んだ腔壁に包まれ、一瞬で絶頂に達しそうになる。

「ちよつと先生つてば！」

「一人だけ、ズルイですよ!!」

愛しの少年を独り占めされたお嬢様達の非難の声もお構いなく、女教師は情熱的に腰を揺らして腔肉でペニスを扱く。まだ呆けたような顔をしている少年の手を取り、自分の乳房へと導いた。

「ンふ……ヒロちゃんも私を気持ちよくしてね……」

ミルクで濡れた乳房の感触は滑らかで、触っているだけで興奮してくる。大きさでは桃華や美夜子に負けるものの、形の美しさや綺麗な乳首に柔らかそうな大人の色香を漂わせる乳房が目の前で揺れた。

下から持ち上げるように乳房を揉み上げると、乳首から白い飛まつが飛び散る。

「はあ……ン、ンふっ……気持ちいいかしら〜？」

「いい、気持ちいいよっ……」

両手に柔らかい感触を掴み、股間の逸物は熱く潤んだ腔肉の中。ミルク風呂のせいで興奮状態のペニスはきつい締めつけを受け、先端から先汁を滴らせている。

「ヒロちゃんの、おち○ちんも……あふん、んっ……とつてもいいわよ〜」

乳白色のお湯で濡れた美女の裸体は扇情的で、照明の光を浴びてヌラヌラと妖しく反射していた。激しくうねる腰が何度も股間に打ちつけられ、接合部から大量の蜜が溢れてくる。

「先生……次はわたくしが裕行さんと、エッチしてもよろしいでしょうか……？」

教師と生徒の情交を目の当たりにして、お嬢様達は言葉を失っていた。しかし最上級生は湯船からあがると、むき出しになった生尻を振りながら四つん這いになって少年へと近づいていく。

「ンふふ、いいわよ……私が、いったら交代してあげる……」

「本当ですか？ ありがとうございます……」

予約を取りつけた少女は嬉しそうに微笑み、少年の方に視線を向ける。

「裕行さんの、感じてる顔……とつても、可愛いです……」

「え、可愛いって……ちゅ、ちゅううううっ！」

頬を赤く上気させた美夜子の顔が迫ってきて、甘いミルクの香りに全身が包まれたかと思うと唇をふさがれた。突然のキスに驚き、瞬きをしている間にちゅっちゅっ唇を重ねあわせられる。お淑やかな彼女が大胆にも自ら舌を差し出し、おずおずと少年の口元を舐め始めた。

「こ、こら！ 美夜子まで何やってるのよっ!!」

「ダメです、次はアタシがヒロ君とエッチしたいっ……」

裕行を独占させるわけにはいかないとばかりに、桃華となつきも浴槽を飛び出した。二人とも陰毛まで丸見えなのに、気にするどころか絡みあう少年達のところに寄ってくる。

「ワガママばかり言わないの、あはぁん……順番よ……」

迫ってくる少女達は軽くあしらったものの、美女の呼吸は荒くなり始めていた。

「裕行さん……好きです……ちゆる、ちゆ、ちゆうっ……」

淑女の積極的なキスは呼吸を許してくれないほど激しい。舌同士を絡めあつて互いの唾液をすすりながら、唇を押しつけてくる。トロンと蕩けた表情を浮かべる美夜子の唾液は甘く、キスの味も格別で脳髓が快感信号で麻痺してしまう。

「ううっ……先生も、美夜子さんも羨ましい……」

愛しの幼馴染みと濃厚に絡みあう美女達になつきは羨望の眼差しを向ける。

「羨ましがってる場合じゃないわよ！ ほら、なつきも手伝いなさいっ……」

負けず嫌いなお嬢様が少年を取られたまま黙っているはずがない。女教師の背後に回りDカップの美巨乳を鷲づかみにした。

「んはぁっ！ ちよ、ちよつと桃華っ……何を……」

「先生が早く満足すれば、それだけ早く順番が回ってくるってことでしょ？」

「こおら！ だからって先生にそんなことを……ンンっ！」

桃華が握力を込めて乳房を揉み搾ると、ピンク色の尖りから勢いよくミルクが噴き出して美女は腰をうねらせる。

「確かにそう言われてみれば……じゃ、じゃあアタシだって……」

お嬢様の作戦を理解した幼馴染みは、グチャグチャと淫猥な水音を奏でる結合部に顔を近づけた。そしてむき出しになっている麗美の秘芽を舌先で突つつく。

「なつきまでっ！　そこは舐めちゃっ……ひゃうっ!!」

余裕の表情で腰を振っていた教師が甲高い悲鳴を上げる。生徒達の愛撫を受けて眉尻がハの字に下がり、悩ましげに身体を振って悶えた。

「うっ……そんなに締めつけたら、出ちゃうよっ……」

元々きつかった従姉の膣内の締めつけがさらに強くなる。何重にも重なる肉ヒダの壁は生き物のように蠢き、射精を促すようにペニスにみっちり絡みつく。

「あつ、裕行さん……とても気持ちよさそうです……」

ぷくつと頬を膨らませた美夜子は、少年の顔に両手を添えて固定する。そして皆に負けじと激しく舌を絡ませ、唇に吸いついてきた。

生温かくザラついた舌肉で口内を舐めしゃぶられ、頭の中は官能一色に染まる。全身を甘いミルクと彼女達の体温に包まれ、男の本能が燻り無意識のうちに腰が動き出す。

「こ、こらあ……ヒロちゃんまで、どうしちゃったのよっ……」

突然の突き上げを食らった美女の身体は大きく跳ね上がり、長い黒髪がバサリと揺れて表情は一変する。快感に悶える麗美は両手を少年の胸に当て、何とかバランスを取っている状態だった。

(こ、このままじゃ、すぐ出ちゃうっ……)

従姉の膣内は小刻みに収縮を繰り返す。激しい腰のうねりも加わり、若いペニスは強烈な締めつけに晒され悲鳴を上げた。

ずりゆ、ずりゆっ、ずりゆりゆっ……。

騎乗位で繋がっているため、教師が腰を落とすたびに男根は深々と突き刺さる。亀頭はずりゆりゆりまで達し、黒髪の美女は口を大きく広げて甘ったるい吐息を漏らした。

「先生、いいなあ……アタシも早くヒロ君とエッチしたい……」

「ダメよ……次はわたしなんだからっ……」

普段見たこともない麗美の乱れた姿に、少女達は驚きを隠せないようだ。しかし一方では快感に翻弄され、乱れる美女を羨望の眼差しで見つめている。

「アンタ達、ちよつと落ち着いてっ……あぁん、気持ちいいっ!」

腰まで伸びた黒髪を振り乱し美女は身体をガクガクと痙攣させながら喘ぐ。

(従姉さんが感じてるっ……)

何もできずに搾り取られてしまった初体験の相手が、自分とのセックスでこんなに乱れている。そんな光景を見せられて興奮しないはずがない。

自然と腰の突き上げも強くなり、大人の女陰の味を貪った。

「裕行さん、もつとわたくしとキスを……ん、ちゅ、ちゅうう……」

熱のこもった吐息を漏らす従姉弟達の性行為に、何とか加わろうと美夜子が必死に唇に

吸いついてくる。激しすぎる接吻のせいで口元は唾液でベタベタになり、顎まで涎で濡れていた。

「な、何よ……美夜子ったら、ちゃっかり裕行とキスしちゃってっ……」

「イったら交代ですからね、先生っ！」

少年を盗られているという嫉妬心を教師への愛撫にぶつける二人。桃華は乳首を抓るように強く摘んでミルクを搾り、なつきは溢れる蜜で濡れた淫核に吸いつく。

「イクっ、そんなにされたらっ……先生、イっちゃうううっ!!」

同時に三箇所を責められている麗美は堪らず悲鳴を上げた。ペニスを咥え込んでいる膣壁が収縮し、絡みつく肉ヒダがざわめく。

「……つぶはっ、出るっ！ 出ちゃう、出ちゃうよッ……」

アクメに達した蜜壺の強烈な吸いつきに、我慢は限界を超えた。深々と子宮口にペニスを突き立てた瞬間、目の前が白くゆがんだ。

下半身に力が入り、腹筋がヒクヒクと震える。

「イクッ！ で、出るっ……あああああっ!!」

拳を握り締めたと同時に、尿道を熱い液体が駆け上がった。

どびゅ、どびゅっ！ どびゅびゅ、びゆるっ、びゅうううう~~~~ッ!!

大量の精液が子宮口を打ち、美女の身体が大きく仰け反った。

「ああ、出てるううっ……ヒロちゃん、あ、あああっ！」

麗美の身体はまるで電流を流されたかのように痙攣を起し、手足をビクビクと打ち震わせている。漆黒の瞳は宙を彷徨い、唇の端からは涎の滴が滴っていた。

ぷしゅ、ぷしゅああ……。

桃色の乳首から射精のようにミルクが溢れる。温かい液体は少年の身体だけでなく、彼の口をふさいでいる美夜子にまで飛び散った。

「も、もう……ヒロちゃんったら、出しすぎよ……お腹パンパンじゃない……」

「ごめん、気持ちよくて……」

肩を上下させながら麗美はうつとりとした表情を浮かべて下腹部を撫でていた。

「ちよつと、終わったなら、交代でしょ！」

「そうですよ、先生っ……順番ですっ!!」

呆気にとられていた桃華となつきが慌てて少年に詰め寄ってくる。

「あら、わたくしも……ぜひ、裕行さんとエッチしたいです……」

美夜子を加えた三人は期待に目を輝かせ、口付けをして催促してきた。

「待って……今、いったばかりだから……」

たっぷりと子宮に精子を注ぎ、長い射精を終えたばかりで少年は荒い呼吸を繰り返している。しかし次々に呼吸を許さない激しいキスの雨が降ってきた。

「ほら、裕行だつてわたしとしたいでしょ？」

「違うよね、アタシだよね？」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)



全国書店で
好評
発売中



「…藤田君は責任取るべき」
睦月への想いに身を焦がすマキナ
彼女は夜の教室で……!?

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

「小説…さかき傘 / 挿絵…天海雪乃



全国書店で
好評
発売中



「当方Mドレイ希望」
魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

不死の吸血姫がDSのご主人様を募集
しているようです

「小説…酒井仁 / 挿絵…にのこ



女幹部メル様の
セカイ征服計画!

「小説…高岡智空 / 挿絵…鈴原依縫

全国書店で
好評
発売中

悪の秘密結社vs正義のヒーロー
イケない戦いの記録!



既刊LINEUP ● 仙聖字態戦姫 / ブナガツ ①～③
● 純魔 / 帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!
● BLANGEL 輪になりに語る悪者の夜

● 借金お嬢小姐 ①～③
● プリンセスリバーシ! 交錯する美姫と魔姫
● 無敵の短剣士がSMに目覚めたようです

● ビルグリムメイデン ①～②
● 歌組後らい節 / カースイーター-1
● 魔海少女ルレイ・エル

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
来かねる場合がございます。い場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!